GOD WITH US

Part 11: LATER LETTERS

Message 6 – Hebrews

The Supremacy of Christ

Hebrews 4:14-10:39

神はわれらと共に

パート１１：後の手紙

第６メッセージ–ヘブル人への手紙

キリストの至高性

ヘブル人への手紙第４章１４節―１０章３９節

はじめに

ヘブル人への手紙の一回目の学びで、著者は、「イエス様は、旧約聖書の預言者よりも、天使よりも、モーセよりも優れておられるので、イエス様への信仰を貫き、揺らぐことなく告白を堅く持ち続けるよう求められている。」という重要なテーマを強調しました。今回は、イエス様が優れた大祭司であるという主張へと移行します。これには、父によって最高位に任命された大祭司としての立場だけでなく、罪のための完全ないけにえを提供し、信者に代わって仲介する者として、聖なる神と罪深い人類との関係の間に立つ仲保者、双方を代表する仲介者でもあると主張します。

I. 私たちの告白する優れた大祭司：4：14 – 10:39

イスラエルの宗教生活という観点から、大祭司は人々と神との関係を仲介したという意味で、最も重要な人物でした。その役割の詳細な説明については、神に立てられたイスラエルの最初の大祭司であった、アロンとその息子たちの奉献を参照してください（レビ記第 8 章）。最も重要な任務は、毎年恒例の贖罪の日（レビ記第 16 章）に国の罪のためにいけにえをささげることでした。手紙のこの長く最も重要な部分で、著者は、旧約聖書の大祭司と儀式体系全体が、最高位である真の大祭司キリストと、私たちの罪を贖うための完全ないけにえを予見していたことを強調しています。

A. 大祭司職の説明：4：14 – 5:10

-私たちの偉大な大祭司に引き続き必要をお委ねしましょう：4：14-16

以下は、キリストの優越性とキリストに固執し続ける必要を強調する冒頭部分の結論であると同時に、また、次のテーマである、大祭司としてのキリストの優越性の紹介でもあります。

4:14 さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。 4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試錬に会われたのである。 4:16 だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあず

かって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。（ヘブル人４：１４－１６）

注：イエスというお名前 は、この世で宣教され、「救い主」として、私たちのために死んでくださった御子の人間性を示すお名前です。「神の子」という称号は、御子の神性を示す言葉です。

イエス様が勝っておられるという理由だけでなく、私たちの大祭司イエス様は、私たちの弱さに同情してくださるという理由で、私たちは、信仰を「堅く持ち」続ける必要があります。イエス様の恵みの玉座に自信を持って（恐れることなく）近づき、弱っているときや試練の時に切実に必要とする慈悲と恵みを享受するべきです。

あわれみとは、神が私たちに相応しいもの（罪の結果である死）を差し控えることを指します。 恵みとは、神が私たちに相応しくないものを与えてくださることを指します。 イエス・キリストは、私たちの罪の代価を全額支払ってくださり、私たちが神の赦しの御前に立つことができるようにしてくださり、主のあわれみによって、私たちが主の玉座に近づくように招いておられます。キリストは、私たちに、慰めと希望と忍耐力をもたらしてくださり、驚くべき愛で私たちを恵みたいと熱望しておられるので、私たちは自信を持ってキリストに近づくことができます。

イエス様は、2 つの重要な資格を満たされた。：5：1-10

下記は、2 つの資格についての説明です。 まず、大祭司は神によって任命されなければなりませんでした。 第二に、罪人に優しく対処できなければなりませんでした。 イエス様は、これらの資格の両方を満たされました。第 1-6 節は、イエス様の神の任命について説明しており、第 7-10 節は、人間の弱さに同情してくださる能力を説明しています。
まず、イエス様の神聖な任命について見ていきましょう。

5:1 大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。 5:2 彼は自分自身、弱さを身に負うているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、 5:3 その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならないのである。 5:4 かつ、だれもこの栄誉ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。 5:5 同様に、キリストもまた、大祭司の栄誉を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。 5:6 また、ほかの箇所でこう言われている、「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。（ヘブル人５：１－６）

イエス様の受肉（神が人となられること）は、その人性が人類の大祭司になるために不可欠であったとヘブル人への手紙の中に強調されています。そこでは、イエス様は永遠の神の子として示され、人となられ、人間が経験することを神自らが経験されることによって、私たちの大祭司となられましたと記されています。 イエス様の大祭司職は、すべての大祭司の子孫、アロンの伝統的体系のものではなく、旧約聖書の神秘的な王／司祭、メルキゼデクによるものです。 著者は、手紙の後半で、再びメルキゼデクについての言及に戻ります。 ここでは、イエス様の苦しみが、私たちの究極の地上の大祭司として、彼が代表してくださる人々に優しく対処できるようにいかに備えられたかを示します。

5:7 キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。 5:8 彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、 5:9 そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、 5:10 神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである。（ヘブル人５：７－１０）

第 7 節は、ゲツセマネの園で、イエス様がなされた「叫びと涙」、苦しみの中の祈りについて言及しています。イエス様の祈りは、単に「死から」の救いではなく、「死の只中から」救われることでした。 十字架上で死なれたキリストの復活は、この祈りに対する父の答えでした。**第 8 節は、**神の御子としても、イエス様は人間の従順を「学ばれる必要があった」ことを示しています。 勿論、イエス様には、自然に御父に従う傾向が備わっていましたが、同時に、後のみ言によって示されている様に、服従と従順を新しい方法で学ばなければなりませんでした：彼は「**恥をもいとわないで十字架を忍び…」（ヘブル人 12：2）**。 イエス様の人としてのご意志を神の御心に服従させられました。**第 9 節は、**イエス様が本質的な存在ではなく、慈悲深く思いやりのある大祭司としての機能において「完全」にされたことを示しています（参照：2：10、5：9、7：28）。

この世は喪失、悲しみ、苦しみに満ちています。 それには理由も答えもないことが頻繁です。 その様な経験の只中において、我が神、主イエス・キリストを思い起こします。イエス様もまた、人としての生涯と苦しみを経験されたので、 よくご存知なのです。 これは、喪失し続ける時代に生きる、私たちの唯一の答えとなることが常です。 私たち自身の苦しみ、誘惑、試練のとき、イエス様から離れるのではなく、弱さに同情してくださる大祭司イエス様に、より近づく必要があります。 イエス様は、私たちを愛してくださっていて、ご自身の地上においての経験から、私たちを理解した上で、助けを求めて御前に来るように招いてくださっています。 未回

答の悲しみや喪失がありますか？ 今、イエス様のあわれみと恵みの玉座にお委ねする必要がありますか？

B. 無視されたイエス様の祭司職：5：11 – 6:20

この部分は挿入句です。イエス様の大祭司の役割についての議論は、第 7 章 1 節から再開されます。 ここは、ヘブル人への手紙全体で繰り返されている警告の一節ですが、より厳しく警告しています。 何人かは教会を去り、すでにキリストに背を向けた者たちがいました。 去った者たちに続くように誘惑されている者たちもいました。

-キリストの知識の内に成熟し損なう。：5：11-14

これらの人々は「教師」の水準まで霊的に成熟するのに十分な時間が経過していましたが、前進する代わりに後退してしまいました。 私たちは、ただじっと初歩に留まっているわけにはいきません。この様な成長の停滞は危険の兆候でした。 私たちの信仰も同様に、成熟しているか、後退させてしまっているかのどちらかであると言えます。

5:11 このことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、それを説き明かすことはむずかしい。 5:12 あなたがたは、久しい以前からすでに教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている。 5:13 すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。 5:14 しかし、堅い食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された成人のとるべきものである。（ヘブル人５：１１－１４）

子供が年齢に適した食べ物を食べていない場合、親は心配します。 同様に、神のみ言を学ぶ霊的な食物摂取は、霊的健康の印であり、必然です。 現時点における食物摂取量をどの様に評価しますか？ 成熟した信者に相応しい「堅い食物」を食べておられるでしょうか？ それとも、まだ乳を必要としておられるでしょうか（聖書の最初の教え）？ より深い聖書の真理への欲求を高める方法 -「堅い食物」は、神の不変のみ言を研究することを先ず優先し始めることです。 そして、第 10 章２５節は、一人でその様にしないことを信者に勧めています。 神の「堅い食物」の摂取量を増すために何ができますか？ 全聖書を読み、オンラインの説教を聞き直し、解説を読むことが可能です。

成長と進展の勧告：6：1-3

ヘブル人への手紙は、厳しい勧告に満ちています。 著者自身も含めて、聴衆にも、キリストとの歩みを押し進めるよう

勧告します（「私たち」と用いているところに注意）。 著者は、彼らが信仰の「ABC」に戻ることを望んではいません。 むしろ、成長を押し進めるようにと勧告しています。

6:1 そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教の初歩をあとにして、完成を目ざして進もうではないか。今さら、死んだ行いの悔改めと神への信仰、 6:2 洗いごとについての教と按手、死人の復活と永遠のさばき、などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめようではないか。 6:3 神の許しを得て、そうすることにしよう。（ヘブル人６：１－３）

上記で述べた様に（ヘブル 5：11-14）、これらの信者たちは、霊的な理解と成熟に向けて前進せず、むしろ以前の教えを儀式的に繰り返すべきと信じていました。例：（霊的生活をもたらすことがなかった）死んだ行いからの回心。 キリストに信仰を置く。清めの洗いや 種々の洗礼についての教え。 手を置く儀式によって、祝福する。ある職責や任務に就かせるための「手を置く儀式」。 すべての人々の将来の復活と神の最終的な永遠の裁きについて学ぶこと等…。 これらは初期のキリスト教会における「初歩的な教え」でした。

-やり直しの不可能性：6：4-8

著者は、様々な類の聴衆のために記していました。信仰に耐えていた強い信者や、成熟していなかった弱い信者、疑い初め、信仰を捨てることを考えていた信者や、また、すでに去り、公にキリストへの「公言された」信仰を放棄した人々等です。以下の箇所は、上記のすべてのグループに向けられていますが、最後のグループ、つまりキリストへの信仰を捨てた人々を描写しています。使徒ヨハネが次の様に記したとき、その様な人々を念頭に置いていました。 **2:19 彼らはわたしたちから出て行った。しかし、彼らはわたしたちに属する者ではなかったのである。もし属する者であったなら、わたしたちと一緒にとどまっていたであろう。しかし、出て行ったのは、元来、彼らがみなわたしたちに属さない者であることが、明らかにされるためである。（第一ヨハネ 2:19）。**

6:4 いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、 6:5 また、神の良きみ言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、 6:6 そののち堕落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能である。 6:7 たとえば、土地が、その上にたびたび降る雨を吸い込で、耕す人々に役立つ作物を育てるなら、神の祝福にあずかる。 6:8 しかし、いばらやあざみをはえさせるなら、それは無用になり、やがてのろわれ、ついには焼かれてしまう。（ヘブル人６：４－８）

この一節の解釈において、解説者たちの意見は分かれています。 3 つの基本的な見解があります。 **1**）クリスチャンも救いを失うことがある。**2**）それは、キリストから背を向けてい

る「クリスチャン」を描写しており、著者は単に再び「新たに生まれる」ことは不可能であると述べています。**3**）ここに書かれている人たちは、クリスチャンの様に振舞ったが、聖霊様が宿っておられず、最初から救われていなかった。**一つ目の見解は、**この箇所を理解するに、最も単純な方法です。しかし、この見解は信者の救いの保証に関する新約聖書の他の数々の明確な教えの箇所と矛盾してしまうので、私たちはそれを拒否します（「一度救われたら、永遠に救われた」例：ヘブる人 13：5; ヨハネ 10：27-30; エペソ人 1：13,14; ローマ 8：38,39、等）。**二つ目の見解は、**人が御霊によって救われ、御霊が住まわれている場合、新たに生まれ変わる経験を繰り返すことは「不可能」（そして不必要）であるという点で、ある程度意味が成します。この見解の問題点は、著者の厳しい警告と勧告の要点全体が無効になってしまうことです。著者は単に「あなたは救われています。再び救われることは不可能なので、キリストに忠実であり続けなさい。」と言っていることになりますが、それだけの呼びかけでは何の力もありません。**三つ目の見解は、**私にとって最も理に適っています。この人たちは、しばらくの間クリスチャン共同体の一員であった人々です。彼らは、キリストへの信仰の告白をしましたが、今、迫害のために、公にキリストを放棄し、背教し、こうして「イエス様に恥辱を与える」のです。著者は、すでに背を向けた人々に話しかけているのではありません。むしろ、すでに去った人々に続いて、自分も背を向けようと考えているクリスチャン共同体に未だ留まっている人々に話しかけています。三つ目の見解の課題は、上記の下線を引いた最初の 4 つの句を説明することです。それらの句はクリスチャンを説明している様に聞こえますが、必ずしもそうではありません。

１．**「光を受けて天よりの賜物を味わう」** – これは聖霊の照らし出す働きを指しますが、彼の照らし出す働きは、彼の再生する働きも起こったことを意味するものではありません。「これらのヘブル人が新約聖書のメッセージを聞いたとき、聖霊は、それをはっきりと理解するために彼らの心と思いを啓発しました。」（Kenneth Wuest、Word Studies、p.114）。彼らは「はっきりと理解しました」が、キリストによる救いのメッセージを「深く把握して」いませんでした。

２．**「天よりの賜物を味わう」**–「天よりの賜物」とは、おそらく福音のメッセージであり、御霊の光る働きに関連しています。これらの人々は、キリストによる救いのメッセージを「味わった」のです。しかし明らかに、キリストの人格と御業に、深い段階で、また最終的な個人的降伏に至っていませんでした。彼らは「味わった」が「飲み込んだ」わけではありませんでした。

３．**天よりの御霊を味わった者** –聖霊によって個人的に住まわれているのではなく、聖霊の働きを分かち合った（目撃した、また

は経験した）人（参加者）を意味するかもしれません。彼らは、御霊の働きが機能していた教会の環境にいた人々かもしれませんが、今となっては、キリストの体との繋がりを放棄しています。イスカリオテのユダがイエス様と一緒に過ごした 3 年間、「御霊の働きを分かち合った」人として思い浮かびます。それでも、彼は救いのメッセージを完全に受け入れて、神に生かされたことは一度もない様です。ユダは、イエス様が命じられた宣教旅行にも二度参加しました。その間ずっと、彼は嘘をつき、仲間の財産からお金を盗んでいました。

４．**良きみ言葉を味わった** – これは神のみ言がはっきりと教えられた環境に出席し、教えの意味を明確に理解した人々を表します。しかし、繰り返しますが、心の深いレベルで教えを捕えていませんでした。おそらく、共同体の慣行にも、それらの価値観や信念を心に完全には受け入れていないながらも、外向きに適合していたに違いありません。

５．**そののち堕落した** – 4 つの一見前向きな句の後、この 5 番目の句は明白です。これらの人々は背を向け、キリストへの信仰を（公に）放棄しました。人がキリスト教から堕落した場合、そもそも彼らが真に救われ、御霊によって住まわれることは決してなかったことを明確に示している様に思われる他の箇所を参照ください（第一ヨハネ 2：19,20; ヘブル人 3：6; コロサイ 1：22, 23）

注釈：聖書の中心的なテーマである「失ったものを見つけ出す」、ルカの福音書第 15 章の「放蕩息子」の物語を思い出しましょう。この場合、「真の息子」が父親の家と備えから離れて、別の生活を試みることを選びました。父の愛から離れた生活が次第に難しくなっていることにようやく気づいたとき、息子は家に帰りました。父は、「この私の息子は死んでいたが生きている」ことを認めました（ルカ 15:24）。ルカの福音書第 15 章や他の多くの箇所（「**わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない（ヘブル人１３：５）」**など）の様な箇所が、ヘブル人への手紙に見られる様な難しい箇所の解釈に役立ちます。

キリストへの献身の証拠：6：9-12

著者は今でもキリストへの信仰を固く持ち続けている人々（「愛するものたち」）に直接語りかけます。 彼らの信仰の現実の信頼できる証拠を裏付ける事柄を指摘します。 それは、彼らの救いに伴う、真に救われた人の心といのちから流れ出す行動と態度です。

6:9 しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救にかかわる更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信している。 6:10 神は不義なかたではないから、あなたがたの働きや、あなたがたがかつて聖徒に仕え、今もなお仕えて、御名のために示してくれた愛を、お忘れになることはない。 6:11 わたしたちは、あなたがたがひとり残らず、最

後まで望みを持ちつづけるためにも、同じ熱意を示し、 6:12 怠ることがなく、信仰と忍耐とをもって約束のものを受け継ぐ人々に見習う者となるように、と願ってやまない。（ヘブル人６：９－１２）

「あなたの働きと、キリストへのあなたの愛と、あなたの奉仕とキリストの民への援助など」 に対する神の願いは明らかです。継続してください！ **怠ることがなく、信仰と忍耐とをもって約束のものを受け継ぐ人々に見習う者となるように…（ヘブル人６：１２）**（第 11 章の忠実な信者たちの模範を指します。）。

-神のお約束に失敗はない：6：13-18

神の「**約束のものを受け継ぐ**」人々について言及したばかりですが（ヘブル人 6:12）、著者はここで、神の約束の信頼性について語ります。 どの様な人生に「展開した」か「展開していないか」などの見かけに関係なく、神のお約束は忠実で真実です。 アブラハムに対する神の約束は、神のみ言の堅実性の一例です（ヘブル人 6：13-18）。 アブラハムとセラは、息子を授かる約束が果たされるまで、25 年間待つ必要がありましたが、神は忠実であるため、最終的に、約束は果たされました。 著者は、神の忠実な約束のために信者が持っている「希望」について記すことによってこの部分を締めくくります。

6:19 この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。 6:20 その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。（ヘブル人６：１９－２０）

この信者たちが何を経験していたかに関係なく、彼らには「魂のいかり」がありました。 そのいかりとは、嘘をつかれることのない神の信頼性への希望であり、忍耐強い信仰に対して最終的に大きな報酬があるという事実でした。

聖書的「希望」とは、「今週、両親から連絡があることを願う」等と言うような、「願い的希望」とは大きく異なります。 聖書的「希望」とは、地上の状況や人々に基づき、神の約束に固定されています。 神がみ言を通して具体的に語られるとき、私たちは神のお約束を主張し、神に希望を置くことが可能です。 例えば。 「**わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない（ヘブル人１３：５）**。 あなた個人に対する神の約束に自分を固定することを学びましょう。 同時に、神があなたの心の願いに答えてくださるよう、信仰を持って祈りましょう。 イエス様が「**22:42「父よ、み心ならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、み心が成るようにしてください（ルカ 22:42）**」と祈られた様に。

C. イエス様の祭司職の比較：7：1 – 10:18

第 5 章 10 節で、著者はイエス様が「**メルキゼデクの命令に従って**」大祭司に任命されたとありました。「**耳が鈍くなる**」危険性についての厳しい警告を終えた著者は、イエス様の大祭司の役割の本質についての深い教えに戻ります。

議論は複雑ですが、全体的な要点は単純です。イエス様の祭司職は、ユダヤ人の旧約聖書体系のレビ的祭司職よりも優れています。ここでの議論の多くは、メシアが「**メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。（詩篇 110：4）**」というメシア預言がなされている詩篇 110 篇に基づいています。

-レビ的祭司職に対するメルキゼデク的祭司職の優位性：7：1-28

メルキゼデクは、アブラハムの物語に登場します（創世記 14：18-20）。著者は、彼が「キリストの型」に当てはまる点が三つあると言っています。**1**）メルキゼデクは、文字通り「平和の王」を意味する「サレムの王」でした（サレム=ヘブル語のシャローム）。イエス様は、私たちの平和の王です。**2**）メルキゼデクは「義の王」でした（melchi =王、zedek =義）。イエス様は、私たちの義の王です。**3**）メルキゼデクは、その系図は啓示されることなく、アブラハムの物語に登場します（イスラエルのレビ的祭司職においては、祭司になる権利を証明するために系図が重要でした）。これは、メルキゼデクには「始まりも終わりもない」という意味で比喩的に解釈ができます。イエス様は神の永遠の子／大祭司であり、始まりも終わりもありません。

7:1 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司であったが、王たちを撃破して帰るアブラハムを迎えて祝福し、 7:2 それに対して、アブラハムは彼にすべての物の十分の一を分け与えたのである。その名の意味は、第一に義の王、次にまたサレムの王、すなわち平和の王である。 7:3 彼には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終りもなく、神の子のようであって、いつまでも祭司なのである。（ヘブル人７：１－３）

著者は、イエス様がレビ的祭司職からではなく、より優れたメルキゼデク的祭司職からの大祭司であるという事実を立証しています。主張は次の通りです。アブラハム（ヤコブの 12 人の息子の 1 人であるレビの祖先）は、メルキゼデクに十分の一の戦利品を納めました。したがって、メルキゼデクは、レビ的祭司職（アブラハム）よりも上位にいる人物である必要があります。これは、私たちの富の 10 分の 1 を捧げることについての最初の言及です。レビ的祭司職は、レビ部族を通して、神によって確立されたことを忘れないでください。しかし、イエス様は、レビの兄弟ユダの部族の出身でした。

7:4 そこで、族長のアブラハムが最もよいぶんどり品の十分の一を与えたのだから、この人がどんなにすぐれた人物であっ

たかが、あなたがたにわかるであろう。 **7:5** さて、レビの子のうちで祭司の務をしている者たちは、兄弟である民から、同じくアブラハムの子孫であるにもかかわらず、十分の一を取るように、律法によって命じられている。 **7:6** ところが、彼らの血統に属さないこの人が、アブラハムから十分の一を受けとり、約束を受けている者を祝福したのである。 **7:7** 言うまでもなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。 **7:8** その上、一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けているが、他方では「彼は生きている者」とあかしされた人が、それを受けている。 **7:9** そこで、十分の一を受けるべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一を納めた、と言える。 **7:10** なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。（ヘブル人７：４－１０）

ここから先、第 7 章の終わりまでは、レビ的祭司職が神による使命を果たすのに十分であったなら、新しい系図（メルキゼデクの系図）から司祭を任命する必要はなかったと主張しています。 現状において、この移行は、レビ族祭司職の系図は、メルキゼデク／イエスの祭司職の系図よりも劣っていることを示します。

7:11 もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であったら――民は祭司制の下に律法を与えられたのであるが――なんの必要があって、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられるのであるか。（ヘブル人７：１１）

（アロンは、レビの司祭部族の出身でしたが、その家族がイスラエルに大祭司の列を提供するために選ばれたので、彼はその部族内で区別されます。アロンは最初の大祭司でした。参照：申命記第 17 章）。

さらに、イエス様は「永遠の（普遍的な）」大祭司であるため、その仲介の御業を受け入れる人々に永遠の救いをもたらすことがおできになります。

7:25 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。（ヘブル人７：２５）

この章は、優れた大祭司イエス様の特質についての抜本的な説明で締めくくられています。

7:26 このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。 **7:27** 彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。 **7:28** 律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。（ヘブル人２６－２８）

Holiness（聖）：キリストは「彼の人格と働きの両方において、すべての神聖な義務を満たされる。」（Vine、p.75）。

Innocence（罪のない）：キリストは罪のないお方であるので、ご自分の罪のためにいけにえをささげる必要がない。

Undefiled（汚れのない）：私たちに代わって神のご臨在に入られる前に、キリストは、水による身の清めを必要とされませんでした。（レビ記 16：4 を参照。）

Separate（区別）：キリストは「その栄光の状態と体によって、罪人から区別されて…（Wuest、p.139）。

Exalted（栄位）：イエス様は、もろもろの天を通り抜け、今やいと高き所におられる大能者の右の座につかれた（ヘブル人 1：3 と 4:14）。

Finished work（完了した御業）：イエス様は、ご自身を世の罪を一度で取り除くいけにえとして捧げられた。イエス様は、いけにえを捧げたお方であると同時に、ご自身がいけにえとなってくださった。（参照：ヨハネ１：２９、世の罪を取り除く神の小羊。）

Sonship（御子としての地位）：この偉大な大祭司は、神の御子であられる（参照：ヘブル人 1：2）。

Perfection（完全）：キリストは、私たちの大祭司としての適性において完全です（参照：ヘブル人 2：10 に関する上記の解説）。

Eternality（永遠）：彼は永遠に完全な大司祭です。

-新しい契約の優位性：8：1 – 10:18

この長い部分では、旧約聖書の祭司によって仲介された古い契約と、イエス様によって仲介された新しい契約を対比しています。中心的な議論は、イエス様が、すべての面で、神がモーセを通して確立された古い契約よりも優れている新しい契約を仲介しておられるということです。この部分では、4 つの主要なポイントに焦点を当てます。

１．イエス様は、優れた幕屋、天の領域の幕屋で大祭司として奉仕されている（ヘブル人 8：1-6）。

モーセに建てるように命じられた地上の幕屋は、イエス様が私たちの大祭司として仕える真の天の幕屋（神の臨在）のひな型と影（ヘブル 8：5）にすぎませんでした。旧約聖書の儀式が真の現実の「影」であるという概念は、ヘブル人への手紙全体に見られます。レビ的祭司職は、キリストの真の祭司職の影でした。幕屋は天国の真の幕屋の影でした。いけにえは、キリストが提供してくださる、一度限りの究極の本物のいけにえの影でした。古い契約は、新しい契約の影にすぎませんでした。

２．イエス様は、優れた契約を仲介された。（ヘブ 8：7-13）

著者は、神がイスラエルの民と「新しい契約」を結ぶことを約束されたエレミヤ書から詳しく引用しています（参照：エレ

ミヤ書 31：31-34）。石板に律法が刻まれるのではなく（シナイ山で与えられたモーセの律法）、神は御霊の働きによって、人間の心の板に律法を記されました。ヘブル人への手紙の著者は、キリストの大祭司の働きは、神と人類との間の、この新しい（すなわち、優れた）契約から直接成長すると主張しています。

8:8 ところが、神は彼らを責めて言われた、「主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ日が来る。8:9 それは、わたしが彼らの先祖たちの手をとって、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約にとどまることをしないので、わたしも彼らをかえりみなかったからであると、主が言われる。8:10 わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。8:11 彼らは、それぞれ、その同胞に、また、それぞれ、その兄弟に、主を知れ、と言って教えることはなくなる。なぜなら、大なる者から小なる者に至るまで、彼らはことごとく、わたしを知るようになるからである。8:12 わたしは、彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない」。
（ヘブル人８：８－１２）

３．イエス様は優れたいけにえを捧げられた。

イエス様は、ご自身をいけにえとして捧げられることによって、至聖所（天の神のご臨在）への完全かつ恒久的なアクセスをお与えになりました。 ここでは、旧約聖書の司祭たちが幕屋の「外庭」で日々奉仕した複雑な過程について詳しく説明します。 しかし、大祭司だけが、自身の罪と人々の罪の両方のために非常に特別ないけにえを捧げることによって、年に一度（贖罪の日に）至聖所に入ることができました。 対照的に、より優れた大祭司であるイエス様は、ご自身を完全ないけにえとして捧げることを通して、真の天の幕屋に入られ、神の最も聖いご臨在への扉を永久に開かれました。

9:11 しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、 9:12 かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。
（ヘブル人９：１１，１２）

イエス様の大祭司の役割とその優れた犠牲に関して、これまでに議論されたすべての重要な問題は、第 9 章の最後の節に上手く要約されています。

9:24 ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないで、上なる天にはいり、今

やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。 9:25 大祭司は、年ごとに、自分以外のものの血をたずさえて聖所にはいるが、キリストは、そのように、たびたびご自身をささげられるのではなかった。 9:26 もしそうだとすれば、世の初めから、たびたび苦難を受けねばならなかったであろう。しかし事実、ご自身をいけにえとしてささげて罪を取り除くために、世の終りに、一度だけ現れたのである。9:27 そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっているように、 9:28 キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。
（ヘブル人９：２４－２８）

４．イエス様は一度限りのいけにえを捧げられた。

これは前の要点の延長でもありますが、ここで強調されているのは、旧約聖書時代に繰り返される必要があったいけにえの性質と、一度限りのイエス様によるいけにえの性質の対比です。 旧約聖書時代のいけにえによって、実際に罪を取り除くことは不可能でした。 実際、それらは罪を取り除くことができる唯一の本物のいけにえ、つまり十字架上のイエス様のいけにえの比喩的な表現でした。 この様に、旧約時代のいけにえは、「世の罪を取り除く神の子羊」であるイエス様の死を指し示す象徴でした。 （同様に、聖餐式の要素は、キリストの十字架を指す象徴です。旧約時代のいけにえはキリストの十字架を指す象徴でした。）

10:1 いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではないから、年ごとに引きつづきささげられる同じようないけにえによっても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。 10:2 もしできたとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をすることがやんだはずではあるまいか。 10:3 しかし実際は、年ごとに、いけにえによって罪の思い出がよみがえって来るのである。 10:4 なぜなら、雄牛ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである。（ヘブル人１０：１－４）

罪を取り除くことのできない繰り返されるいけにえとは対照的に、私たちの罪は、キリストの一度限りのいけにえによって、清めていただいたのです。

10:10 この御旨に基きただ一度イエス・キリストのからだがささげられたことによって、わたしたちはきよめられたのである。10:11 こうして、すべての祭司は立って日ごとに儀式を行い、たびたび同じようないけにえをささげるが、それらは決して罪を除き去ることはできない。 10:12 しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、 10:13 それから、敵をその足台とするときまで、

待っておられる。 10:14 彼は一つのささげ物によって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである。（１０：１０－１４）

この種の聖句は、私たちにキリストの一度きりのいけにえを喜ばせるべきです。 イエス様の完全ないけにえに私たちが追加したり、取り除いたりできるものは何もありません。 私たちは、ただそれを楽しみ、感謝し、神の目的のために用いられる「**生きた、聖なる供え物**」として私たちの人生を捧げることによって、神の犠牲的な愛に応えます（ローマ 12：1,2）。

D. 用いられたキリストの祭司職：10：19-39

著者は、キリストの祭司職の役割と旧約聖書の祭司職の役割を対比する長い部分（ヘブル人 8：1-10：18）を記し終えました。その結論は、キリストは、私たちの優れた大祭司であるということです。 ここで著者は再び、聴衆に、この偉大な大祭司から離れず、むしろ彼に向かって近づくようにと警告します。

-「キリストに近づきなさい」との励まし：10：19-25

10:19 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、 10:20 彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、 10:21 さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、 10:22 心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか。 10:23 また、約束をして下さったのは忠実なかたであるから、わたしたちの告白する望みを、動くことなくしっかりと持ち続け、 10:24 愛と善行とを励むように互に努め、 10:25 ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。（ヘブル人１０：１９－２５）

一連の勧告のことばに注意してください。「**みまえに近づこうではないか。**」「**わたしたちの告白する望みを、動くことなくしっかりと持ち続け…。**」「**愛と善行とを励むように互に努め…。**」これらはギリシャ語で「接続法」と呼ばれ、著者は自身を推奨に含めています。これはヘブル人の著者の一般的なスタイルです。（参照：ヘブル人 4:11; 4:14; 4:16; 6：1; 10：22, 23, 24; 12：1; 12:28; 13:13; 13:15）

- 生ける神のみ手のうちに落ちないようにと警告：10：26-31

手紙が進むにつれて、警告文はより厳しくなります。ここで著者は、「真理の知識を受け取った」後、「故意に罪を犯す」人々を待つ裁きについて警告しています。前の警告箇所（ヘブル人 6：4-8）に関する解説によると、この部分の解釈方法については、様々な見解があります。私の見解は、著者はすでにキリストと信者の共同体から離れた人々に言及していると

いうことです。彼らはすでにキリストへの信仰を公に放棄しています。これらは「真の信者」ではありません。もし彼らに本当に御霊が宿っていたなら、忍耐していたでしょう。著者は、自身を含むすべての人（私たち）に話しかけ、忠実な人（11 章で例として挙げられている模範者たち）の足跡をたどるようにとすべての人に忠告しています。

10:26 もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。 10:27 ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。 10:28 モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、 10:29 神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。 10:30「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」と言われたかたを、わたしたちは知っている。 10:31 生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである。（ヘブル人１０：２６－３１）

著者がキリストから離れた人々を描写するために用いた句に注意してください。**「故意に罪を犯す。」、「神の子を踏みにじる。」、「キリストの十字架の血を汚れたものと見なす。」、「恵みの霊を侮辱する。」**、これらは、誘惑に苦しむ、キリストとの歩みが足りないクリスチャンを描写する言葉ではありません。（参照：パウロ自身の闘いについての説明。）これらの句は、かつて「クリスチャン」という名前と何らかの形で関連付けられていたが、今ではキリストを完全に公に放棄した人たちを描写しています。

-この聴衆のより良いことがらを思い出す：10：32-39

第 6 章 9－12 章の様に、著者は強い警告から、人々によるキリストへの献身の明確な証拠を示す過去の鮮明な思い出に移行します。イエス様は言われました、「**7:16 あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。（マタイ７：１６）**」この人々は、迫害の環境の中で、「信仰を保つ」ための困難な戦いの只中にいました。それでも、以前は、行動と態度において、本物の実の証拠を示していました。著者は彼ら（そして著者自身）に、信仰を持ち続けるように警告しています。

10:32 あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。 10:33 そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間にされたこともあった。 10:34 さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。 10:35 だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが

伴っているのである。 10:36 神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。10:37「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。10:38 わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。10:39 しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。（ヘブル１０：３２－３９）

上記の下線の句は、著者の本意を示しています。 次の章では、当時の世における試練、困難、迫害の只中にもかかわらず、神への信仰を押し進めた旧約聖書の人々の長い項目を見ていきます。

ディスカッションの質問

１．旧約聖書の礼拝体系とキリストの働きという概念について話し合ってください。 旧約聖書の礼拝システムとキリストの働きとの間にどのような類似点がありますか。

2. ヘブル人への手紙のこの長い重要な部分は、イエス様の人格と御業に対するあなたの見方をどの様に深めますか？

3. ヘブル人への手紙のこの部分は、キリストとのあなた自身の歩みにおいて、どの様にチャレンジしますか？

4. ヘブル人への手紙は、キリストの「成長に向かって押し進む」ことに重点を置いています。 現在の状況でこれを行うにはどうすればよいでしょうか。